

「ゆとりを生み出す酪農の経営・技術戦略」

1998年度シンポジウムは「ゆとりを生み出す酪農の経営・技術戦略」と題して、1998年12月11日午後北海道大学学术交流会館にて約110名の参加者を得て開催された。池滝孝氏（帯畜大）、岡本全弘氏（酪農大）を座長として、齊藤晶氏（齊藤牧場の山地酪農：齊藤牧場）、関行男氏（通年舎飼いの大規模酪農：豊原生産組合）、吉川友二氏（ニュージーランドに見るゆとりを生み出す酪農経営・技術戦略：アレフ牧場）から話題提供がなされた。各話題提供終了後、総合討論が行われた。以下の要旨は当日の討論をまとめたものである。

座長：それでは、総合討論に移りたいと思いますが、お三方それぞれ、特徴のある酪農を実践されておられたり、ニュージーランドで4年間も体験してきておられます。本日のテーマは、「ゆとりを生み出す」ということではありますが、この「ゆとり」という言葉一つとってみてもですね、いろいろなゆとりがあるだろうというふうに思います。時間的なゆとり、収入の面でのゆとり、環境問題ですね環境負荷に対するゆとり、あるいは、それらを総合した精神的ななんらかのゆとり、様々あるかと思えます。しかし、ここでそれぞれ区別してそれぞれ論議する方が、本当は論議が深まるかもわかりませんが、残されている時間もそこそこでございますし、あまり細かくゆとりの中身を時間的なものとか収入の面だとか区切らずに論議を進めていきたいと考えます。特に、最初にお話しなさった齊藤さんと関さんのところは、ちょうど我国のオペレーションとしては、典型的に両極端といえますか、そういうところがあると思います。この辺について、再度、質問と言うよりは御意見等いただければありがたいと思います。

池田氏（天塩町）：現在北海道の北の方にいますので、蹄耕法まではいかないけども、集約放牧をやっている方はいます。それで、ニュージーランドのことはよく聞かされて、一回行ってきたいなと思っていたのですが行かなかった経験がありませんでした。最初におおまかな地形、それと牧草の種類ですね、ペレニアルライグラスだろうと思いますけども、そのやり方というか、豆科の割合だとか、さらに、草地更新は日本であればよく更新しますけども、聞いている範囲ではあまり草地更新しないと聞いていたので、そのへん案外わかるようでわからないので、お尋ねいたします。それから牧区の関係が22ページでは40牧区と書いていますけども、ただ漠然と書いてあるので、何が一牧区なのかその辺もわからないので教えていただきたいと思います。それと齊藤さんにも地形や草種についておきかせいただければと思います。

吉川氏：まず、草種ですけどペレニアルライグラスとクローバーです。その理由というのは、夏の干ばつのためにトールフェスクやファラリスとかを植えている人がいますけれど、それはとっても管理が難しいようです。ペレニアルライグラスでしたらだいたい14日から21日の間に放牧すればオーケーと言われているのですが、トールフェスクその他の草は収穫適期を過ぎてしまうと放牧しても牛が嗜好性も落ちてしまって食べない、そういう意味ではペレニアルライグラスというのは、少しタイミングがずれても放牧の管理が楽だという意味で、ペレニアルライグラスが一番、自分でもやってみて一番楽なようです。次に、草地更新なんですけど、向こうは肥料でペレニアルライグラスというのはとっても栄養を要求する草なんで、雑草よりも勝たせればよいという考え方で、リン酸をまいていけば、斜面であればブローアをもって

きてプロアでとばしてまいたりするんですけど、草地更新できないようなところはそういうようなまき方で、それ以上のところは向こうは飛行機で肥料をまくんですけど、飛行機で肥料をまく会社がありまして、向こうの戦後の農業の技術革新の一番というのは飛行機で肥料をまくというのが技術革新で一番でありまして、それによってニュージーランドの農業の生産性が上がりました。そうすると、ペレニアルライグラスが、放牧をちゃんとしていけば他の草種に負けないでちゃんと生えてきてくれます。牧区ですけど、むこうはだいたい14日から20日で輪換してます。それでだいたい朝搾乳して一牧区、夕方搾乳して一牧区と、そう考えてみると40牧区くらいあったら一番楽だと、朝一牧区、晚一牧区、そういう考え方があるのですけれども、季節によってどんどんどん早さというのは14日から冬だと100日で一回と変わっていくんですけど、とりあえず一番使い勝手がいいということで、それと、そう意味で細かく40くらいには区切っています。一群でだいたい少なくとも20牧区くらいはむこうの酪農家は持っています。だいたい広さなのですが、広さはそんなに考えなくても20牧区区切ったらそれに合わせるストックングレートに合わせていく、牛のほうを合わせていくと、そういう考え方でいいと思います、牧区の数。何haに区切るというのはありません。それにあうストックングレートに牛をあせていくという、そういう考え方でいいと思います。

齊藤氏：私の所は標準にはならないと思いますが、山にまくときは、牧草の種類はオーチャード1kg、チモシーは0.5kg、ペレニアルも0.5kg、メドウフェスクが0.5kg、それと、ケンタッキーブルーグラスも0.5kg、それにホワイトクローバーが0.5kgです。それにあの、名前忘れましたが、北農試の落合先生がこれも試しにまいてみな、これ日陰に強いよというふうなことでいただいたやつ。それも入れると6つか7つになるんだろうと思

ます。最初、まいた2年3年くらいはオーチャード、チモシー、ペレニアルは優性に生育します。うちの放牧地というのは、安定して、固定してしまったのはケンタッキーブルーグラスとホワイトクローバーが主体になっています。その中に、退化したようなオーチャード、ペレニアルライグラス、メドウフェスクそういうものが入っています。最終的にはケンタッキーブルーグラスとペレニアルライグラスとホワイトクローバーが残っていてくれればいいと思っているのです。ところが、それが定着するには3年から4年かかるのです。だから、最初から安定した牧草を作ろうとすると定着するまで3年も4年もかかるということです。3年くらいまでの間にオーチャードやチモシーやペレニアル、メドウフェスク、そういうものが利用できればいいというような考え方です。次に、ケンタッキーブルーグラスが安定するように増えてくれればいいよというふうにしてもっていってま。そうしても、その年の気候、雨の降り方の状態においてクローバーがまったくなくなるときもあります。ところが、クローバーがなくなってもそんなに気にする必要が無いんだろうと思います。何年か経つとまた今度クローバーが入ってきます。そうしたときにそれに合わせた放牧とか肥料もやる必要がありますけども、そんなに神経使わなくても、ほうっておいても自然と草は変わっていくはずなのです。山でも草でも、山の樹木の場合だったら30年間くらいで変わっていきます。草はたいがい6、7年くらいでかわっていきます。変わっていくのも計算に入れてちょっと放牧の量とか肥料の量を配慮していくと、そんな難しいことを考えなくても状況を見ていけば自然とそれがのみこんでこられるんだろうと思います。

座長：私自身もそうなんですけど、技術問題、みなさん興味があるところだと思いますが、一応です。今日はゆとりをめざすということでありますので、私の司会の仕方がちょっと悪かったかな

と思っています。余裕があればまた技術問題にもかえってきたいと思うのですが、ひとまず、今日話題を提供された3人の方に、それぞれがもっているゆとりのイメージといいますか目指すゆとりというものが少しずつちがうのではないかというふうに思います。それでスピーカーの皆様、一言ずつ私にとって目指すゆとりはこういうものですというところをですなまず御披露いただこうと思います。斉藤さんからお願いします。

斉藤氏：わたしはですね。条件的にはほんとに厳しい条件のなかにですね、ここに自分の楽しみみたいな生き甲斐みたいなものを感じていくにはどうすればいいんだということを考えみるとですね、牧場全体を日本庭園のスケールの大きいものにつくっていくんだと、そういうふうな考え方で毎日やっています。だから仕事をしているのだというよりも庭造りしているのだというムードが50%くらいも入っているのかも知れません。人からみるとあれは朝から晩まで働き、動きっぱなしでかわいそうだなと直接言ってくれる人もおります。ところが私は、庭好きな人が朝ごはんも昼ご飯も食べないで夢中になっている人がおりますよね、それと似たようなところがあるのですよ。それで、自分が好きだからやっているのだ、結局、笹を刈ってみたり、あの木を残してこっちの木を切ってみたら全体的にどう景観が変わるのだろうかと、そういう神経が常に根まわりしているなかに入っているということです。それで、ちょっとでも暇があればうちのなかで寝そべっているよりも山に行って眺めておった方がいいというような、眺めると今度あの木はちょっと邪魔だな、このやぶはちょっとないほうがいいなとなるとまたそこで仕事をはじめてしまうのですよ。やはり自分の仕事にそういうふうに趣味的なものが感じられるようになるってそんなゆとりなんて考えなくても経営をやっていること自体が一つのゆとりにもつながることになるのではないかと思うのですよね。と

ころが、私がそう思っても家族全部がそうになっているとは限りません。だから、それを理解できない家族は、私は一生犠牲になっているのだというつもりになっている家族もいるかもしれません。

関氏：私はですね、サラリーマンを経験したという部分もありまして、12年間一応ですねスーパーのダイエーでそれこそ朝から晩までという言い方が正しいかと思えますけど、そういう形で働いてきました。やはり、自然の中で自分の考えていることをそこで実現させていきたいということをも前提にこの酪農の世界に入りました。たまたま私がやりたいことがこの豊原生産組合でできるのかなということで、7年前になりますけど、平成4年の4月からいまの仕事に就いております。たまたまそのときに先程話した公社営の畜産建設事業が始まって、そのなかで自分たちがやりたいこととか、自分の収入も欲しいし、それから時間的なそれをゆとりと言っていていかかわりませんが時間的に自分の時間がとれるということをおぼせもちながら、さらに農業が誰でもができるような農業にしていかなければいけないかなということも今考えています。言ってみれば、ゆとりという言い方が正しいかどうかかわりませんが、一般的に暮らしているサラリーマンよりも心豊かに自然の環境の中で暮らせるという部分がゆとりといえるのではないかなと、生活のレベルとしてはもちろん所得という部分もあるし、それを確保しながらそういうことができるということではないかなというふうに思います。

吉川氏：私は、ニュージーランドから帰ってきて、朝起きるともう太陽がこんなに高いのですよね、朝8時で。ニュージーランドは今サマータイムで時差が4時間なのです。あんまり緯度が変わらないので、だいたい朝8時頃に起きればまだ太陽が下なのですけども、私のゆとりは、朝明るくなったら働きはじめて夕方暗くなったら仕事を終えると、だいたい目標としては朝3時から仕事をはじ

めて、晩の3時には仕事を終えるというのが私のゆとりかなと思います。それで、関さんもおっしゃった通り誰にでもできる農業ですか、私もそれを目指しています。誰にでもできて儲かる、そういう農業を目指しています。そういうところからゆとりが生まれてくるのではないかなと、先程も申しましたけども、自立するってことだと思いますが、農業というのは自営なので一番自立しやすいはずなのだけどもなんか朝から晩まで働いているというのは、自分の時間なのだから朝はじめて夜、まあ、斉藤さんのような自立して長く働かれている方もいらっしゃるんですけど、私はそういうことだと思います。

座長：どうもありがとうございました。3人の皆様の意見をお聞きになって、どなたか、コメント等。はいどうぞ。

寺島（芦別）：芦別の寺島といいますけども、よろしくお願ひします。ゆとりということで、今日のテーマはゆとりですけども、酪農家というのは家族経営が多いと思いますけども、私がいるところから、ここに3軒酪農家が来ていますけども、ヘルパーやコントラクターとかいう団体とかそういうものは一切ありません。そういうなかで、ゆとりを生み出すためには日々どうしたらゆとりが作られるのだろうかというそういう考えがいつも気持ちの中にあります。そういうことで、そういう家族経営のなかで、1日も泊りがけでどこかへ出かけるというかそういうことができない地域で酪農をやっているわけです。本日この会にしても、ここに来るためにはやはり、それだけなりの用意というかそういう家族の協力もあって来ているわけです。そういうその普通一般的に酪農家っていうのは家族経営が多いですけども、そういうゆとりを生み出すために、1日も泊まれないような経営っていうのがかなり多いと思いますけども、ニュージーランドなんかでも家族経営だとは言いますけども、そういうところは日本と経営の仕方

てのはやはり相当違うのかなと、どういうふうな形でゆとりをニュージーランドでは生み出しているのかみたいなことをアレフ牧場の吉川さんにお尋ねしたいと思います。

吉川氏：わたし、ニュージーランドにいますと、だいたい日本から視察に来る方がいまして、それでだいたい最初に旦那さんがくと次ぎに奥さんが来ると、だから、順番で来て一緒に出かけられないっていう状況があるみたいで、それで、ボスにニュージーランドの人達みんな奥さんと旦那でみんな遊びに行っているけどうらやましいと言ったら、ボスは、昔はそうだったと、昔はニュージーランドも家族経営で奥さんも一緒に働いていた、だから二人で出かけることができなかったと言っていました。今は、もう、それで大変な80年に補助金無くしたのですけど、それで、奥さんが農場の中で働いていたら農場経営できないと、そういうときに奥さんは外に出て金をかせがぐと、かせがせると、そういう段取りにして牛も増やして行って一人で酪農経営ができる段取りに変えていったようです。それで奥さんは外で働いて金を稼いでくる、それでやっと成り立つような状況だったそうです。それを乗り越えてしまえば今はもう二人でどこでも遊びに行けるのだというように言っていました。それとまあ、向こうは牛の価値も安いというのがあって人に搾乳を任せても平気なのだと思います。向こうはだいたい学生のバイトですか、安いバイトが来て、搾乳してあと放牧ですか、明日はこの牧区に入れてくれ、明後日はこの牧区に入れてくれと言う指示だけ出しておいて、それで旅行にでかけると1週間とか、だからそういう意味でヘルパーまで雇わなくてもそこらへんの学生の夏休みに帰郷してきた学生ちょっと連れてきて安くできてしまうと、そういう風にやります。そこまでの段取りをするまでは非常に大変な時期もあったようです。

花田（帯畜大）：ニュージーランドでは、ほとん

ど生えている草で牛を飼乳を搾っているらしいですけども、それだけ相当収量がある、草の量というか質もよいんだらうとおもいますが、どれくらい収量、1 ha当りの収量があるのか教えてください。それと、北島と南島では気候も違うと思いますけども、やはり北も南も同じような酪農体系をとっているのかそういうのもちょっと教えてください。

吉川氏：向こうは海洋性気候でして、北島も南島も日本ほどはそんなに極端には違わないです。それである一応北島でも南島でもだいたい基本的には一緒と考えていいと思います。収量は、乾重量 ha当り16 t です。

座長：よろしいですか。それでは他にどなたか、はいどうぞ。

花田（帯畜大）：お話しをうかがっていると、ニュージーランドでは飼養形態をシンプルにすることによって、いろいろなこう人にものを頼めたりすることによって余裕をつくるってことができるということが一つの提案みたいなような感じに私は受けとめたのですが、関さんにお伺いしたいのですが、そういう考え方というのは関さんみたいな規模の大きい経営ではそういうふうに飼養形態をシンプルにしていこうとかそういう工夫とかはされているのでしょうか。

関氏：飼養形態をシンプルにするってことは、放牧を主体にするってということと受けとめていいですか。

花田（帯畜大）：そういうわけではなく、例えば通年サイレージってことで飼養形態はシンプルになりますよね。舎飼いで飼養形態でよりシンプルな飼養形態にしていこうとかそういう取り組みとかにかかされていることはないのでしょうか。

関氏：そのぶんでは、ほとんど年中食べさせる餌は同じですね。ですから、かかわるのは群によって餌のレベルというか内容が変わってきますから、それだけです。基本的にはグラスサイレージを主

体にして、コーンとあとは配合飼料、それから町内で調達できるイネ科の乾草、それから輸入のルーサン乾草、というかたちになりますからそれを通年、コーンについては一次きれる時期がありますけども、将来に向けては一応コーンも通年でできるようなかっこうで収穫ができるように面積を広げていこうというふうに考えていますんで、そういう意味では飼養形態は非常にシンプルでしょうと、あるいは、オペレーションのうえでですね、全体のオペレーションのうえでコストをどう抑えるかというやり方だと思えますよね、それがやり方として放牧というやり方もあるし、我々のようなフリーストールミルクパーラーという方法もあると思うのですよ。ですから、結果としては経費率を下げた自分のみりかどのくらいはいるかなと、じゃそれを我々の場合でしたら、組合の中で分配をしているわけですけど、個人でしたら自分のところのみりになるというところだと思えますけども。という答えでよろしいですか。

花田（帯畜大）：ちょっと私の質問がわかったのかもしれないですけども、例えばニュージーランド、吉川さんのお話しだと、ある程度シンプルに飼っても牛はそんなにダメージを受けないと、てきとうに放牧に出していればこう、決められた牧区に出しとけばそれなりに牛乳を生産していくけども、例えばその通年舎飼いですね、乳量レベルが高いような状態でそういう単にそういう飼養形態をシンプルにするといってもいいのかどうかシンプルにできないなにか理由があるののかなという気がしたんですけども、例えば乳量が例えば、例えばですよ、1万キロを超えるような牛群を飼っているときにですね、なにか苦労というかこれから取り組まなくちゃいけない課題とかおありだったらお聞きしたいのですけど。

関氏：今のところですね、一応目標としては牛群トータルで経産牛で1万キロを目指しています。今のところはね。その時点で経営としては非常に

安定する数字になってきます。人件費をどのくらいアップさせるかって部分もありますけども、基本的には人件費を今のレベルで抑えながらですね、1頭当たりの乳量が上がっていけばそれだけみりりは大きくなるということですから、今の飼い方を踏襲していけばそういうふうになってきます。それを1万キロにするための仕掛けとして、遺伝的な改良をしていくというぶんは今実際にやっているわけですけど、そういうところをメインで今考えています。条件としてですね、ニュージーランドと例えば上川という地区を比べると全く違うわけですよ。上川の場合でしたら雪解けが5月の中旬から雪の降り始めが10月の下旬くらい、半年は全く畑に入れないというかね、草が生育できないような状況のなかにあるよと、そのなかで面積的には限られた面積の中でどのくらいの頭数まで飼えるのかと、これは餌の供給の問題があるので、そういう条件の中で我々の求めるところをどうやって満たしていくかということが経営として考えなくちゃいけない部分だろうと、そのなかで自分たちが考えるゆとりが実現できればいいんじゃないかなということだとおもうのですけどね。

座長：どうぞ。所属と名前をお願いします。

柏村（帯畜大）：このような経営では定年というような考えも必要かと思います。それでここでは39.5歳という平均年齢ですが実習生を入れると33.3歳、ということはやはり実習生、若い実習生をいつも確保するというのが一つの前提になるのかなという疑問とですね、ニュージーランドでは実習という考えが全くないということが書いてあったもんですから、その辺の労働者の確保、そのような点はどう考えておられますでしょうか。

関氏：おっしゃる通りです。うちの定年は一応65歳ということで考えています。実際にですね、作業にあたれるのはたぶん55くらいまでだろうと、じゃ、その先をどうするかということで、一つは先程の話の中で地域でいろいろなかたちのこと

をやっているよと、そのなかで活躍できる場はないかということが一つですね。それから、歳をいったときに例えば周りの環境を整備するとか、そういうことも仕事の一つでしょうと、ただしそのときの給料としてどうするのですかということがあるんで、それは形として例えばもう60歳もいけばそれなりに子供も大きくなって皆さんの生活も安定しているので、じゃあ給料としてはこれくらいですよと、かなり出資もして頂いているので、それについての配当はずっと同じ形で出していきますよというようなことになってくると思います。かたちとしてはね。フレッシュな労働力の確保ということで、やはり実習生をローテーションさせていくという事は逆に言うと実習生を確保する方法、手段をもつということと、実習生がこれから先ですね、例えば私どもの法人にメンバーとして入るという方法もあるし、それから、自立して農業を始めるという方法もあるし、またほかに行つてというような方法もあるんでいろいろな道が選べるようなかたちをつくっていく必要があると、でそれが先程のグリーンサポートの研修センターとかということに結びついていきます。

吉川氏：労働力の確保は今非常に優秀な労働者をみんなひっぱりだこでいかに優秀な労働者を育てるかというのが酪農産業の生き残りですか、そういうふうな課題になっていると思います、ニュージーランドでは。それで季節に、だいたい6月1日からシーズンが始まるのですけども、むこうは1年間の契約で、契約を結びます。その5月31日が近くなってくると新聞の2面くらい新聞の求人広告ですか、埋め尽くされるような感じで、それに応募して履歴書ですか、ちゃんとした条件がよくっていい農家というのは必ず見つかりますけども優秀な労働者が、だから、そういう評判ですか、農場の評判とかでいい労働者を得られるというのがあります。あと、しっかりした住宅を建ててあげるとか、給料をしっかりあげるとか、短い労働

時間でとか、そういうので、ボスが選ぶ方は仕事を見つけるほうもいい仕事を見つけようと思っているとちょっと難しいですね。逆にね両方、いい労働者を見つけようと思っていると難しいですし労働者がいい仕事を見つけようとするのも難しいですし、とっても競争が激しいですね。

柏村（帯畜大）：もう一ついいですか。すみませんつづきです。実はうちの畜産大学では学生が入ってきて就農希望というのが結構あるのですね。特に最近では放牧酪農に魅力を感じて、就農したというのがたくさんあるのですけど、ニュージーランドなどでは非農業者がそこに入っていけるという仕組みが上手に動いているのではないかと思うのですが、日本の非農業者が農業に参入できる機会、このようなことも一つの将来的なゆとりに関係するのではないかと思うのですけど、その点、どの方でもよろしいのですが、もし御意見がありましたらお聞かせ願いたいと思います。

齊藤氏：私は、一番ゆとりというものを見つけやすいのはですね、結局原点はなにだったのか、また、自然の摂理というのはどういうふうになっているのか、生態系を追求することだろうと思うのです。だから、牛は牛の本能を呼び出すこと、牛がやることは全部牛にやらせること、そういうふうにこう突き詰めて行くとゆとりというのはそういうところから出てきて、私なのかも日本庭園をつくっているんだみたいなことを言いましたけど、そういう考え方ってのは結局は、生態系はどうなっているのだ、牛ってのはどうすればここで手を抜いたらどういうふうにごいていくんだっていうふうな、そういうふうなとらえ方が非常にこれから大事な問題なのだろうと思います。ただ技術技術、または、いろんな管理、そういうものを追求するよりも今自然というものをもう一回謙虚に素直にとらえなおす、そういうものが一番とゆとりを生み出していくことにつながるんだろうと思う。そうすると、日本の今荒廃している山も、また、

過疎になっている土地も、みんなその辺からすばらしいもんが見えてくるんだろうと思うのです。だから、あんまり技術とか管理というものを追求するよりも今率直に自然というものをもう一回、始めからみなおすっていうふうな、生態系を見直す、牛の本能を引き出すというふうなそういうふうな考え方が非常に大事な問題ではないかなと私はそんなふうに考えています。

座長：関さん

関氏：うちの牧場にも毎年っていうかね、さっき言ったように実習生をずっとかかえていますので、いろんなことをやりたいというかたが何人もいますし、そういう人達がやはりさっきも申し上げましたけど、自分が考えているような農業、酪農にしても畑作にしてもね、ができるような仕組みをやはりつくってやる必要があるのではないかなと、吉川さんの話を聞きながら思ったのですけども、ニュージーランドは農業も例えばどっかの会社に就職するのと同じ感覚だと思うのですよね。ただ、日本の場合はそうになっていないということだと思うのです。ですから、日本も同じように職業の一つとして農業を選べるというようなところがないとできないのではないかな。ずっと話しをニュージーランドの話しを聞いていくなかでは、マネジメントとワークという部分がはっきりとやはりですね分離されているよと、で、ボスはマネジメントするぞとオーナーはマネジメントするぞと、で、ワーカーがいるよという考え方だと思うのですよね。それが、基本的な経営の考え方になってくるのではないかなと。そういうなかで、新規にやるかたは何をしたいのかね、ワークをするのかマネジメントをするのかという選択をどっかでしていくでしょうと、で、ニュージーランドの場合でしたらシェアミルクという制度があって共同出資をしていくよというところでワーカーからマネージャーになっていくのではないかなという気がするのですけど、どうでしょうか。

吉川氏：私は、制度みたいな仕組みをつくってやるっていうのはとっても賛成です。それともう1つ付け加えなければいけないのは、ワークとマネジメントも分かれているのだけでも、それと資本も分かれていると、それが一番大切なポイントで、資本家は働かないでそういう仕組みをつくると、そうすると若い人が働けると、だから、農家のひとは自分で農場を持ってそれだけの資本を持ったら働かないと、仕事は任せると、そういうような仕組みがニュージーランドの仕組みです。でも、向こうの農家を見たら優雅な生活していますよね。搾乳をしている人、私はワーカーですね、働いていたからボスの代わりに搾乳していたわけですけども、つまり、搾乳している農場所有者ってのはそんなにいない、例外だと考えていいと思います。日本もそこらへんの農家で自分の農場を所有した人は、管理を他の人に任せると、そういうような仕組みができれば日本もそういう企業に就職するように入っていくと、そういうことはあると思います。

座長：ま、あ、はい、右の方。

新（ビコンジャパン）：ゆとりを生み出すということですけども、ゆとりというのは時間だとか、それだとか、心のゆとり、経済的なゆとり、そういうのがゆとりということだと思えるんですけども、今皆さんに聞きたいのはロボットミルクというのがあるんですけども、牛が自発的に入っていくと、ほとんど人がいないと、現状の中ではロボットミルクの普及のことだとか性能のことだとかありますけども、ロボットミルクがはいって放牧っていうことができ、そういうことを考えるとゆとりっていうのができるのかできないのか、それをみなさんに聞きたいのですけども。

座長：象徴的な例だとおもいますね。その延長線上にということかそこに行き着く前にもゆとりを生み出すしかけだとか仕組みだとかいうようなものがあるんじゃないかと思えます。例えば、ヘルパー

さん、最初ですね。次ぎにコントラクタですね。その先にロボットがあるというふうに思いますが、こういうようなしかけだとか仕組みがゆとりを生み出すためにどうしても必要なものかどうか、無くてもまた、あればいいのかな、その辺についてみなさんにちょっと意見を伺いたいと思います。

斉藤氏：私は、ロボットもあればいいなと思うことはあります。しかし、それより先に、人間はどんな生き方をしたいのかということが肝心なのだろうと思うのですよ。そして、自分がどんな生き方をしたい、自分が幸せに感じるということはどういうことなのか、そういうことをもっと追求して見なくちゃいけないと思います。勉強して偉くなったのはいいけども、その人達が悪いことしょっちゅうしているわけですよ。そうすると人間のやはり、どんな生き方をしたいのかまたしなくちゃいけないのか、そういう基本的なものがきちっとしてなけりゃ駄目だと思うのです。しかし、そういうことを教えるよりも気づかせるようなシステムが必要なだろうと思うのです。ところがそのきちっとしたものを気づかせるということは、やはり自然を理解させるよりほかはないだろうと思うのです、現時点においては。なんぼ教えても、頭で覚えるかもしれないけども気づかなければ覚えたことにならないのです。だから、そういう面からしてやはり子供達は自然の中に十分に遊ばして感性が育つような環境をつくらなければいけない。そういうことを農民がまたは農村が受け皿にならなければいけない。そういうことから全部総合してですね、やはり自分の生き甲斐、ひとつのゆとり、または使命感、そういうものを全部総合して考えなくちゃいけないだろうと思います。

座長：じゃ、次お願いします。

関氏：ロボット搾乳については是非将来的には導入を考えていくべきだろうと、経営を考えればね、というふうに思っています。ただ、今の施設にあうか別問題として、仕事を効率的に進めるという

意味では考えていくべきだろうと思います。ということですね。

吉川氏：考えたこと無かったですけども。ロボット搾乳ができれば、むこう結構お年寄りの方も小さな農場を守って働いている方もいるのですが、そういう方も、といっても、一人で100頭ちかく搾っている結構お年寄りの方もいるのですが、そういう方もそういうロボットで搾乳できるようになったらずっと100歳くらいまでニュージーランド人だったらやるのではないかなというふうに思います。

座長：じゃ、干場さん。

干場（酪農大）：酪農学園大学の干場です。いろいろお話、大変面白いと思って聞かせていただいたのですが、先程池滝先生がいろいろなゆとりがあるとおっしゃったと思うのですが、おそらく人によってゆとりの感覚っていうのは違うような気がします。例えば、僕自信のこと考えますと、やはり自分の好きなことをやっているということが自分の楽しみになっているという気がするのですが、齊藤さんがおっしゃったその域にはいきませんが、そのためにかみさんにいつでも怒られている状況ってのがあるんですけども、ですけど、どちらにしてもいくらお金儲かったとしても自分のやりたくないことやってたらなんもおもしろくないだろうと気がします。そういう意味では、人によって確かに違うような気がするのですが、ただ、酪農やったり農業やったりする場合は、最低条件といいますか、守らなくちゃなんないところが個人によって違ったとしても、やはり最低限守らなくちゃいけないことがあると思います。それはおそらくきちんと循環させているということではないかなって思います。循環ができていればあとは本人が何をしようとするかっていうのは、それぞれの人の自由ということなのかなって感じがしていますけど、その辺いかがかと思います。それとちょっと先程、話しがちょっ

と先程の質疑の中で、ストックングレートの話ですが、ニュージーランドの話があって、3頭とか2頭とかってありましたけど、もうお気づきの方がたくさんいらっしゃると思いますけど、ニュージーランドの場合はたしか400kgくらいの牛の大きさと乳量も3500くらいってことで、おそらく向こうの3頭ってのは日本の2頭くらいと排泄するものからすると同じと考えていいのではないかなという気がするんですけど、その辺もちょっと聞かせていただければ。

座長：はい、いまの御意見についてどなたか。まず、循環の問題ですね。

吉川氏：まず、むこうはだいたいフリージアっていうホルスタイン系列の牛が500kgで、フリージアとジャージーのクロスが450kgで、ジャージーが400kgです。

座長：関さんにかその循環の問題でお考えありますか。

関氏：今おっしゃられた循環っていう場合は、生産するものがあって排泄するものがあって、それが循環しているという意味でとらえてよろしいですね。そういう意味だと、うちのばあいは無駄にしている部分が結構あるかなということは思います。ただ、それが先程我々の地域の中でグリーンサポートという会社をつくりましたよというところは、その産業廃棄物になっている堆肥とかそういうものを循環させていこうと、地域の中で、そういうことをもくろんでいます。我々単体ではできないけども地域の中でそういうことをやっていこうと、逆にいえば、畑の人、それから水田の人はこれから先生き残っていくためには有機栽培をしていかないと、ものとして売れないというような環境にもなってきていますから、そういうものを地域の中でやっていこうという、これも要は循環させるための仕組みの問題だと思いますけども、そういうことをつくっていこうというふうに思います。あと、ゆとりという意味合いっていうかね、

それはまさに今先生がおっしゃったとおりではないかなというふうに思います。

座長：えーっとそれではですね、ずいぶん時間が、ようやく白熱してきてこれからおもしろいところだと思うのですが、ちょうど時間になってしまいました。物質の循環の話もありますが、経営の継続ですよ、これも非常に大切な、ものがまわる、それから経営は継承されていく、こういうようなところが、非常に私としてはやはり大切ではないかと思えます。それで、先程ですね、まずニュージーランドの場合はワーカーになる。それから、いくらか、少しずつですね、資本を貯めてシェアミルクカーになっていって、成功したワーカーシェアミルクカーはですね、やがて資本家としての農家になるというステップを踏むあるいはそういう制度になっているというところがありました。これはですね、先程の論議だと非常にいい仕組みだというような話もありましたが、日本式にですね、今様々な援助があって、旧来昔に比べれば新規就農が可能になるような相対的にやりやすくなってきたようなところがあります。これは、一体型の経営者であり労働者でありマネージャーである日本式の酪農、就農形式でもありますが、これはある意味では非常にハッピーだというふうに私は思っています。そういう利点をですね、生かして噛み締めて、それぞれの方々の胸の奥にあるそれぞれのゆとり、収入的なゆとりもあるでしょうし、時間のゆとりもあるでしょうし、環境負荷への十分なゆとりも必要だと思います。そして、社会の一員としてほかの産業との係わり合いもあるでしょう

し、またそういう生まれたゆとりをですね、楽しむ。こっちのゆとりの使い方といいますか、そちらのほうもやはり、ゆとりを生み出すのが全ての目的になってしまうのではなくて、生まれたゆとりを楽しむライフスタイルをつくりあげる、時には、昔、宮沢賢治が農民芸術概論っていうのをですね、岩手国民高等学校というところではじめて講義をして、そのあとすぐ、自らも就農してですね、収入の面でも労働の面でもまったくゆとりはなかったんじゃないかと思えますが、そこでゆとりを超えた芸術をつくりあげていったということもございます。まああの、座長の能力がないために、とりとめのないシンポジウムになってしまいました。ここらへんでお開きにさせていただきます。3人のスピーカーのみなさんに、拍手をお願いして閉会にしたいと思います。

近藤氏(北大)：どうもありがとうございました。これを持ちまして、平成10年度の北海道家畜管理研究会シンポジウムを終了致します。このあと、御案内にございますように菅御殿というところで懇親会を行います。シンポジウムの第2次会というかたちで、そこでもご活発な御意見の御交換をお願いしたいと思います。場所がわからない、わかりにくい、お配りした地図ではわかりにくいという方は5時半にロビーから森田先生と一緒に会場まで案内をいたしますので、そちらについていただければ幸いです。それでは以上で終わります。どうもありがとうございました。

(文責 森田 茂)